

1学年だより

夢の宅配便

1年学年主任

水野 喜代治

命

その時代、その時代で物事に対する倫理観や価値観は異なります。現代社会において、この世の中で一番大切なものはなんですかという質問をしたら、ほとんどの人が「それは、命です。」と答えると思います。この答えは絶対であり、だれも命より大切なものがあるなどとは思えないと思います。しかし、時代によっては、一番大切なものが命ではない時もありました。

1941年～1945年のアメリカ合衆国との間に起きた太平洋戦争において、日本では、国民の一人ひとりの命がとても軽く扱われました。この戦争で約310万人の尊い命が奪われました。戦局が不利になっていく中、多くの若者の命が太平洋で次々に失われていきました。国は、今では考えられない特攻隊という部隊を結成していきます。特攻隊とは、飛行機に爆弾を積んでアメリカの軍艦めがけて体あたりするという特殊部隊です。約4000人の若者が特攻隊で命を捨てました。天皇陛下の名のもとに、尊い若者の命が捧げられたのです。当時の日本では、「国のために死ぬ」とは英雄として扱われました。

戦後(1945年以降)、日本は敗戦を境に倫理観や価値観が大きく変わりました。何よりも大切に考えなければならないものは、「人権」ということになりました。一人ひとりの人権こそが尊重されなければならないということが国民の心の奥に浸透していきました。人の命が最も大事なことになったのです。当たり前のこの感覚は310万人もの人々の犠牲を代償に手にしたものなのです。

私が学生の頃は、日常の会話の中に、「お前、こんな事もできないの。死んだほうが良いよ。」と言うように「死ぬ」とか「死ね」といった言葉がよく使われていました。学校の先生までも「こんな問題も解けない生徒は死んだほうが良いよ。」などと生徒に向かって話していました。今の日本では考えられない感覚です。今は、人に向かって「死ね」とか言ったら人格を疑われると同時に、言われた人は深く傷つきます。命を軽く扱う言動がどんなに人としてやってはならないことなのかをみんなが知っています。ですから、「死ね」などの言葉を人に向かっていう人は本当にいなくなりましたし、その言葉を言うことを許さない社会となりました。

少し前までは、暴力も日常的に使われ、許されていました。人権を大切にする感覚が低かったのです。学校の先生が宿題を忘れた生徒に「ゲンコツ」をしたりすることも日常でした。私はいたずらだったので、小学校から高校にいたるまで、先生に「ビンタ」されたことを今も覚えています。暴力は、最終的には人の命を奪うことができる行為です。たった一発のパンチでも当たり所が悪ければ人の命を奪うことにもなりかねません。暴力は、人権を脅かす最たる行為の一つとして考えられています。ですから、暴力をふるう人を社会は許しませんし、振るう人も姿を消しました。今、暴力をしたら、周りの人から激しく非難をされると思います。

こんなに人権をみんなで大切にしている社会で、先日、愛知県の中学生在が包丁で同級生を刺して命を奪うという大変な事件が起きてしまいました。日本中がこのニュースを聞いてショックを受けたと思います。どんなことがあっても人の命を奪う行為が許されるわけはありません。命は、一度失ったらどんなことがあっても帰ってはきません。命を奪われた中学生は命を取り戻すことはできないのです。自分も含めて、命とは何よりも尊いものなのです。このようなことがもう二度と起きてはいけません。私たちは、自分も含め、この命というものの大切さをもう一度心の奥に刻まなくてはなりません。全ての人の命が何よりも尊重されるより高い社会を実現することが大切だし、常に自分自身がその社会を築く一人でなければならないと思います。